

論文審査の要旨(甲)

申請者領域・分野 氏名	循環病態科学領域 循環病態内科学教育研究分野 氏名 西崎 公貴
指導教授氏名	若林 孝一
論文審査担当者	主 査 加藤 博之 副 査 福田 幾夫 副 査 大門 眞
<p>Safety and efficacy of contemporary catheter ablation for atrial fibrillation patients with a history of cardioembolic stroke in the era of direct oral anticoagulants (直接経口抗凝固薬時代における、脳梗塞既往を有する心房細動患者に対する最新のカテーテルアブレーション治療の安全性と有効性)</p>	
<p>直接経口抗凝固薬(DOAC)時代における、脳梗塞既往のある心房細動 (AF) 症例に対するコンタクトフォース(CF)ガイド下アブレーションの安全性と有効性を検討した。対象は 2012 年 10 月～2015 年 12 月までに当院で初回 AF アブレーションを行った 447 症例(平均年齢 62 歳、男性 296 名)である。アブレーション施行前 6 ヶ月以内に脳梗塞あるいは一過性脳虚血発作を起こした 17 例を Group1(6 ヶ月以内既往群)、6 ヶ月以上前に起こした 30 例を Group2(6 ヶ月以前既往群)、既往を有さない 400 例を Group3(非既往群)と定義し患者背景を比較検討した。プライマリアウトカムは各群における周術期合併症の頻度、脳梗塞再発の有無、術後 3 ヶ月間と定義した blanking period 以降の AF あるいは心房性不整脈の再発とした。結果として、平均年齢はそれぞれ Group1 ; 68±8 歳、Group2 ; 66±8 歳、Group3 ; 60±11 歳であった。CHADS₂ スコアはそれぞれ 3.3±1.1 点、3.0±0.6 点、0.9±0.8 点であった。抗凝固薬内服の内訳は、ワルファリン 108 例(24.1%)、ダビガトラン 101 例(22.6%)、リバーロキサバン 147 例(32.9%)、アピキサバン 87 例(19.5%)、エドキサバン 4 例(0.9%)と約 8 割の患者で DOAC を服用していた。性別や発作性 AF の頻度、左室駆出率、左房径、抗凝固薬の種類、アブレーションの手術時間や透視時間は 3 群で有意差を認めなかった。Group1 および 2 では周術期合併症は生じず、Group3 において心タンポナーデ 1 例、心外膜炎 2 例、動静脈瘻 2 例、穿刺部血腫 2 例が生じた。フォローアップ中の有害事象として、Group1 で心不全入院 1 例、Group3 で心不全入院 4 例、頭蓋内出血 1 例(術後 8 ヶ月目)、脳梗塞 1 例(術後 11 日目)を認めた。AF あるいは心房性不整脈の非再発率は Group1 76.5%(13/17)、Group2 86.7%(26/30)、Group3 79.1%(296/374)であり、 Kaplan-Meier 解析の結果では 3 群間に有意差を認めなかった。また Group1 と Group2 を合わせた全既往群(47 例)における非再発率は 83.0%(39/47)であり非既往群と比べ有意差を認めなかった。さらに、Cox 回帰解析により AF 再発の予測因子を検討したところ、持続性 AF[ハザード比 1.94 (95%CI 1.13-3.31)]が最もリスクの高い因子であり、過去の脳梗塞既往との有意な関連は認めなかった。</p> <p>以上、本論文は DOAC 時代における、CF ガイド下 AF アブレーションは脳梗塞既往の有無に関わらず高い安全性と有効性を有していることを初めて明らかにしており、学位授与に値する。</p>	
公表雑誌等名	Journal of Cardiology 2016; in press